

## 宗像市とNPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」と連携した地域での子育て支援活動：母性看護学の教員による育児相談会

著者	園田 希, 牧野 翔太, 棚橋 美智子, 大和 寿美, 新名 美佳, 大重 育美, 永松 美雪
著者別名	SONODA Nozomi, MAKINO Shota, TAKAHASHI Michiko, YAMATO Sumi, NIINA Mika, OOSHIGE Narumi, NAGAMATSU Miyuki
雑誌名	日本赤十字九州国際看護大学紀要 = Bulletin of the Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing
号	19
ページ	1-6
発行年	2021-03-31
URL	<a href="http://doi.org/10.15019/00000733">http://doi.org/10.15019/00000733</a>

## 実践報告

### 宗像市とNPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」と連携した地域での 子育て支援活動：母性看護学の教員による育児相談会

園田 希<sup>1)</sup> 牧野 翔太<sup>2)</sup> 棚橋 美智子<sup>3)</sup> 大和 寿美<sup>3)</sup>  
新名 美佳<sup>4)</sup> 大重 育美<sup>1)</sup> 永松 美雪<sup>1)</sup>

宗像市子育て支援事業の1つに、宗像市とNPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」が協働して運営している子育て支援センター「ふらこっこ」がある。「ふらこっこ」で開催されている子育て支援事業「ベビータイム」と「ベビーデイ」での「ミニ相談会」では、本学の母性看護学の教員が宗像市より依頼を受け、助産師として、宗像市で乳児を養育している母親を対象とした育児相談を行っている。本稿では、2019年度に開催された「ミニ相談会」での本学教員の助産師としての活動の実際と今後の展望を報告する。本報告は今後の育児支援の在り方を検討する際の資料となることが期待される。2019年6月の「ベビータイム」では、個別相談として授乳や離乳食、子どもの体重増加に関する相談を受け、集団指導では主にスキンケアに関する指導を行った。2019年9月の「ベビーデイ」では、個別相談として乳房トラブルに関することや母親自身の薬剤の内服に関する相談を受け、集団指導では、スキンケア・室温・寝具・上着や肌着の調整方法、子どもの熱の測り方、子どもへの薬の飲ませ方に関する指導を行った。母親達は様々な工夫をしながら日々の子育てをしており、抱える心配事や悩みは多岐にわたっていた。「ミニ相談会」に参加した母親達からは、自身の生活の中に新しく得た情報を取り入れようとする発言が聞かれた。今後も宗像市子ども育成課担当者、NPO法人むなかた子育てネットワーク担当者との連携を図り、母親達がいきいきと子育てができるよう、育児相談だけでなく、パンフレットを用いた集団指導や、母親達の繋がり作りを取り入れた育児支援が必要である。

キーワード：助産師、看護学教員、育児相談、子育て支援事業

#### I はじめに

急速に少子化が進み、日本の国内出生数は2019年に90万人を割った<sup>1)</sup>。この急速に進行している少子化と核家族化の進行に伴い、日本の子育て環境は大きく変化し続けている。昨今、家事や育児を1人で行うワンオペ育児や、地域との繋がりが希薄化し周囲からの助けを得ることができず孤立した状態での「孤育て」、親として子どもへの接し方が分からないなどの子育て力の低下、育児不安などマスメディアやSNSでも頻繁に取り上げられ、日本の子育てが非常に厳しい状況にあることがわかる。なかでも、子育て力の低下や育児不安の一因として、親となる以前の子どもとの接触体験の不足があげられる<sup>2)</sup>。日常生活の中で子どもとふれ合う機会は激減

し、約半数もの女性は子どもとふれ合ったことがないまま親となっており<sup>3) 4)</sup>、さらに、この数は増加することが予測される。そのため、このような背景の中、親となった女性に対しての子育て支援は、早急に策を講じるべき課題の中の1つであり、今後も継続的な支援が必要である。

本学が位置する宗像市でも1990年以降0歳～14歳までの年少人口が減少しており、少子化が進行していることがわかる<sup>5)</sup>。さらに、1990年以降、核家族世帯も増加している<sup>4)</sup>。宗像市の子育て環境の現状と課題の1つに、核家族化等が進み、子どもの心身の発達に応じた育児やしつけの仕方がわからず子育てに自信を持ってない保護者がいることが挙げられている<sup>6)</sup>。そのため宗像市は、2015年度から2019年度の宗像市子ども・子育て支援事業計画の1つとして、保護者が子どもの心身の発達に関する知識や、年齢に応じた関わり方を十分に理解し、子どもの育ちに喜びや生きがいを感じることができるよう子育て

1) 日本赤十字九州国際看護大学  
2) 宗像市教育子ども部子ども育成課子ども育成係  
3) NPO法人 むなかた子育てネットワークこねっと  
4) 佐賀大学大学院医学系研究科博士課程

て支援事業を展開している<sup>5)</sup>。この宗像市の子育て支援事業の1つに、宗像市とNPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」が協働して運営している子育て支援センター「ふらっこ」がある。「ふらっこ」は5名のスタッフが常駐し、乳幼児向けのおもちゃや絵本が常備してある子育ての「ひろば」としての役割だけでなく、1日に2回開催されるわらべ歌や絵本の読み聞かせを中心とした親子のふれ合い遊びを行う「スポットタイム」、月に1回開催される生後6か月までの乳児とその母親を対象とした「ベビータイム」や生後11か月までの乳児とその母親を対象とした「ベビーデイ」、「赤ちゃんくらぶ」など多くの事業が展開され、宗像市で子育てをする母親達を支えている。宗像市子育て支援事業の中の「ベビータイム」と「ベビーデイ」では年に3回、専門家による「ミニ相談会（以下、相談会とする）」が開催されている。相談会では、宗像市とNPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」と連携し、本学の成育看護（母性看護領域）の教員3名が助産師として活動し、地域での育児相談を中心とした活動を行っている。

そこで本稿では、2019年度の「ベビータイム」および「ベビーデイ」で開催された相談会での本学教員の助産師としての活動の実際と今後の展望を報告する。少子化、核家族化の現在、本報告は今後の育児支援の在り方を検討する際の資料となることが期待される。

## II 本学教員が活動するミニ相談会の概要

ミニ相談会の構成メンバーは、宗像市子ども育成課職員、NPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」運営スタッフ、本学の母性看護学の教員（以下、助産師とする）である。宗像市子ども育成課職員が全体の統括を行い、NPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」運営スタッフは、相談会の進行や参加した母親達が個別相談を受けやすいよう母親達と本学教員を繋ぐ役割、そして母親達が相談中には乳児の見守りという役割を担い、助産師は相談会で母親達の育児相談の専門家としての役割を担っている。

相談会は前半部30分の個別相談と後半部30分の集団指導の2部構成である。前半部の個別相談では、NPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」運営スタッフと助産師が協働し、母親の個別の相談

に応じている。後半部の集団指導では、助産師と参加した母親達で構成されるグループを1～2グループ作成し、月齢に伴う乳児の発達や生活リズムの変化とその対応や季節の変化によって生じる可能性のある身体的変化とその対処方法に関して集団指導を行っている。なお、集団指導の内容に関しては、事前打ち合わせの際に決定している。

## III ミニ相談会までの準備

宗像市から、2019年度の本学教員への派遣依頼は、6月に開催される生後2か月から6か月児を対象とした「ベビータイム」での相談会、9月と12月に開催される1歳未満児を対象とした「ベビーデイ」での相談会の計3回であった。

活動開始の準備として、6月の「ベビータイム」開催前に、第1回相談会の事前打ち合わせおよび年間のスケジュールの確認を行った。事前打ち合わせの参加者は、宗像市子ども育成課担当者、NPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」担当者、助産師で、「ベビータイム」と「ベビーデイ」の対象者や現在までの相談会の様子、相談会の流れの確認、相談会での集団指導の内容の確認を行った。集団指導の内容は、気候の変化とともに多くの母親達が悩みを抱える、あせも対策を中心としたスキンケア・衣類の調整（6月）、熱の測り方・衣類の調整・薬の飲ませ方（9月）、感染症に関する内容（12月）となった。その後の連絡事項等のやり取りは、宗像市子ども育成課担当者と助産師がメールで行った。

相談会では、母親達の持ち合わせている力を最大限発揮できる、つまりエンパワメント<sup>7)</sup>してあげることができるよう、母親達の個々のニーズを聞き取り、授乳方法や離乳食の工夫など母親達とともに考えていく支援の方法をとった。さらに、現在の健康状態をより高いレベルへと向上させるという母性看護学の基盤となるウェルネスの概念<sup>8)</sup>をもとに、母親達がよりよい育児ができるよう、乳児だけでなく母親自身に生じる症状への気づき、スキンケアなどのセルフケアを促すための助言、知識や情報を生活へと取り入れるための工夫を、支援として盛り込んだ。

## IV 倫理的配慮

倫理的な配慮として、本稿の内容から個人が特定できないようにするとともに、写真の掲載に関しては、本投稿に関する主旨を参加者および運営管理

表1. ミニ相談会までの準備スケジュール

日付	ベビータイム	ベビーデイ
2019年 4月以前	2019年度ベビータイム・ベビーデイの日程および担当教員の決定	
6月	第1回ミニ相談会に関する事前打ち合わせ 担当者紹介・ミニ相談会の概要説明・対象者の 特長・時間配分・集団指導の内容など	
	第1回ミニ相談会	
9月		第1回ミニ相談会に関する事前連絡（メール） 時間配分・集団指導の内容など
		第1回ミニ相談会
12月		第2回ミニ相談会に関する事前連絡（メール） 時間配分・集団指導の内容など
		第2回ミニ相談会

者、運営スタッフへ説明し同意を得た上で写真撮影を行った。

#### V 「ベビータイム」での相談会の実際と参加者の反応

「ベビータイム」での相談会への参加者は、第1子の子育て中の母親が88%を占め、第1子以降の子育て中の母親は12%であった。相談会は前半部30分の個別相談と後半部30分の集団指導を実施した。

前半部の個別相談の内容としては、頻回授乳が続いていることや夜間の授乳の回数が減らない等の授乳に関する内容や児の体重増加に関する内容、離乳食に関する内容であった。授乳に関しては、自身で入手した産後の情報と、自身の状況が異なることで不安を抱えていた母親もいたため、児の成長発達が順調であることや母乳の間隔は個人差が大きいことを伝えるとともに、母親に対する労いのことばをかけ、日中に児と休むなど母親も休息を取れるような授乳の方法について提案し、母親の生活へと取り入れる工夫を考えた。また、児の体重増加に悩む母親へは、児の体重の変化や授乳回数と量を確認のうえ、現在の授乳方法で児が順調に成長していることを説明するとともに、母親と哺乳量を減少させないような授乳のタイミングや混合栄養の方法について考えた。個別相談の内容は、類似したものはあるものの全く同じものではなく相談内容が多岐に渡っており、1人1人の相談に時間を要するという状況であった。離乳食を開始したものの「食べない」「進まない」といった相談については、食感を改善するための調理法を説明した。「ベビータイム」は生後6か月の乳児の母親が対象となっていたため、児の月齢が近

い母親達が参加していた。そのため、母親同士で経験を語り合える場を作ることで、悩みを抱えているのは自分だけではないことを知ることで安心する母親もおり、母親達の語りの中から解決の糸口を見出す母親もいた。

集団指導での汗疹予防対策を中心としたスキンケアでは、まず、汗をかいた時の対処方法やその際の工夫（衣類や肌着の下にガーゼやタオルを入れておくこと）について口頭で説明し、次に肌トラブルが生じやすい部位とその理由や入浴の他に水浴びを取り入れるなどの皮膚を清潔に保つ工夫を説明した。また、皮膚トラブルが生じた際の小児科や皮膚科への受診のタイミングを併せて説明した。熱中症の対策に関しても、児は体温調節機能が未熟であることを口頭で説明し、暑い場合と寒い場合の見分け方や汗取りパットなど調節しやすい衣類の紹介など、具体的にアドバイスを行った。「水分補給は白湯がよいですか？」との質問があったため、母乳で良いことを伝え母親自身の水分補給も促した。集団指導に参加した母親たちからは、「うちでもやってみよう！」等の感想が聞かれた。しかし集団指導は、口頭での説明のみであったため、伝える情報量が多いという結果であった。

#### VI 「ベビーデイ」での相談会での実際と参加者の声

「ベビーデイ」での相談会への参加者は、第1子の子育て中の母親が81%、第1子以降の子育て中の母親は19%であった。相談会は前半部30分の個別相談と後半部30分の集団指導を実施した。

前半部の個別相談では、子どもの便秘に関すること、離乳食開始後に授乳回数が減ったことによる乳

房のトラブル、母親自身の内服に関する相談があった。個別相談では、まず、母親の抱える悩みを傾聴するとともに、乳児の成長発達に伴った生活リズムの確立の過程を説明した。さらに、母親が抱える悩みを解決する方法について提案し母親の選択肢を増やすとともに、注意すべき症状や病院の受診のタイミング等も併せて説明した。また、母親の頑張りに対して労いの言葉をかけ、母親として成長している過程をフィードバックしていった。「ベビーデイ」の参加者は、月齢11か月までの乳児の母親達であったため、児の成長発達も様々で、相談内容は児の発達に応じたものが多くみられた。

相談会後半部の集団指導では、スキンケア・室温・寝具・上着や肌着の調整方法、子どもの熱の測り方、子どもへの薬の飲ませ方に関して口頭にて説明をした。内容が多岐にわたるため、15分間を室温・寝具・上着や肌着の調整方法に関して、残り15分間を子どもの熱の測り方、子どもへの薬の飲ませ方に関する内容とした。スキンケアについては保湿剤の選び方と塗布するタイミングについて説明を行い、室温・寝具・上着や肌着の調整方法に関しては、汗をかいた時の対処方法やその際の工夫（衣類や肌着の下にガーゼやタオルを入れておくこと）について説明を行った。子どもの発達や季節を考慮し、暖房器具の安全な使用方法と熱傷予防に関しても知識の提供を行った。子どもの熱の測り方、子どもへの薬の飲ませ方に関する内容では、まず、子どもの熱を測った経験の有無や子どもに薬を飲ませた経験の有無を母親達に聞き、経験者にはその時の方法や率直な感想を語ってもらった。母親達から聞き出した体験や感想をもとに、月齢に応じた乳児の味覚の発達と薬の飲ませ方、薬剤の形状とメリット・デメリット、薬の飲ませ方のコツへと話を展開していった。また、薬を飲ませる際の母親の心理や子どもへの関わり方、薬を飲み終えた子どもへの関わり方についても説明した。集団指導に参加した母親たちからは、方法の理解だけにとどまらず、「(子どもに) おおらかに接しないとですね！」等の子どもへの関わり方への感想も聞くことができた。しかし、本相談会を実施した時期は9月であったため、季節の変化に応じた育児に関する内容や、今後予測される発熱への対応など、集団指導の内容が多岐に多いという結果であった。



写真1. 集団指導の様子

## VII 今後の展望

本稿では、宗像市とNPO法人むなかた子育てネットワーク「こねっと」と連携した、本学母性看護領域の教員が地域で行った助産師活動の実際を一部報告した。相談会には、多くの心配事や悩みを抱えながらも子どもと向き合い必死に子育てをしている母親達の姿があった。相談会に参加した母親達の反応から、本学教員が行った支援は、心配事や悩みの解決だけでなく、母親達が自身の持つ力を発揮し、自信を持ち育児へ取り組むことができるような支援であったと考える。

相談会での個別相談の相談内容は「ベビータイム」「ベビーデイ」ともに多岐に渡っていた。生後2か月から6か月児を対象とした「ベビータイム」での個別相談は、一般的に子どもの夜間睡眠が増える時期に生じる不安や離乳食が開始する時期に生じる不安が主な相談内容であり、類似した内容も存在しているという特徴があった。一方、生後11か月までの児を対象とした「ベビーデイ」では、子どもの成長・発達に伴う子どもの変化だけでなく、母親自身の変化に対する不安も聞かれ、母親達が抱える不安が子どもの月齢や成長・発達による影響を大きく受けているという特徴があった。今後も、月齢に応じた支援を行っていくとともに、「ベビータイム」では類似した悩みを持つ母親同士がお互いの悩みを共有し、解決できる場<sup>9)</sup>を意図的に作っていくことも有効であると考えられる。「ベビーデイ」では対象となる児の月齢による成長・発達が大きな時期であるため、相談内容も多岐に渡るが、月齢の異なる児と



その母親達をグループとし、悩みの相談や母親としての成長を感じることができる場<sup>10), 11)</sup>を作ることにも有効であると考ええる。

集団指導では、「ベビータイム」「ベビーデイ」とも、今後必要になる知識の提供を行うことでセルフケア能力を高める支援を行った。しかし、情報量が多く、口頭での説明のみであったため、母親達の理解や知識を生かした実践については課題が残る。そのため、集団指導で提供する情報を吟味したうえで情報提供を行い、さらに、集団指導後も母親達が正しい知識を必要時に得ることができるようパンフレットを作成するなど<sup>12)</sup>、工夫が必要である。

宗像市子育て支援事業へ、助産師の資格を持つ本学教員が関わることの意義として、妊娠期から相談会までの経過を踏まえた上で、専門職としての知識を生かしながら、個々の生活に適した助言をできることにあると考える。さらなる育児環境の変化や家族の多様性が予測され、さらには、新型コロナウイルスのパンデミックなど刻一刻と変わる社会の影響を受け、母親達は多くの困難に直面する可能性が考えられる。そのため、今後も宗像市子ども育成課担当者との連携を図り、母親達のニーズに応じた支援を行う必要があると考える。

## 謝辞

本稿投稿にあたり、ご協力いただいたお母様方に心より感謝申し上げます。

## 文献

- 1) 厚生労働省. “令和元年(2019) 人口動態統計の年間推計.”  
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/suikei19/index.html>, (参照 2020-02-04).
- 2) 厚生労働省. “厚生労働白書 平成 15 年版 第 2 章子どもをとりまく現状・課題.”  
<https://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/03/>, (参照 2020-02-04).
- 3) 持田聖子：妊娠中の生活・親になるための準備. ベネッセ総合研究所：第 1 回 妊娠出産子育て基本調査(横断調査). 34, [https://berd.benesse.jp/jisedaiken/research/pdf/kihonC\\_023-047.pdf](https://berd.benesse.jp/jisedaiken/research/pdf/kihonC_023-047.pdf), (参照 2020-02-04).
- 4) 持田聖子：親になるための準備. ベネッセ総合研究所：第 2 回妊娠出産子育て基本調査(横断調査). 26, [https://berd.benesse.jp/jisedaiken/research/research\\_23/pdf/03.pdf](https://berd.benesse.jp/jisedaiken/research/research_23/pdf/03.pdf), (参照 2020-02-04).
- 5) 宗像市：第 3 章 本市の子ども・子育てを取りまく現状. 宗像市子ども・子育て支援事業計画. 13, <https://www.city.munakata.lg.jp/kosodate/w051/060/003a.pdf>, (参照 2019-11-19).
- 6) 宗像市：第 5 章 計画の内容. 宗像市子ども・子育て支援事業計画. 78-79, <https://www.city.munakata.lg.jp/kosodate/w051/060/005.pdf>, (参照 2019-11-19).
- 7) Gutierrez, L. M.: Working with women of color: An empowerment perspective. *Social Work*, 35(2): 149-153, 1990.
- 8) Dunn, H. L.: High-level Wellness for Man and Scosociety. *American Journal of Public Health*, 49(6): 786-792, 1959. doi:10.2105/ajph.49.6.786
- 9) 前原邦江, 大月恵理子, 林ひろみ, 他：乳児をもつ家族への育児支援プログラムの開発 - 出産後 1～3 か月の母子を対象とした家族支援プログラムの評価. 千葉看護学会誌, 13(2) : 10-18, 2007.
- 10) 藤川智子, 本田陽子, 谷津かおり：地域助産師による育児支援の効果. 母性衛生, 44(3) : 208, 2003.
- 11) 園田希, 小川真世, 堀内成子：初産婦が乳児とふれ合う体験“Mama’s Touch プログラム”に協力した乳児の母親の声. 日本助産学会誌, 32(3): 427, 2019.
- 12) 山口さつき, 亀田愛子：母乳育児継続に向けて産褥早期からの支援 正しい授乳方法について記載した写真入りパンフレットを使用して. 母性衛生, 59(2) : 527-535, 2018.

## Report

### **Community childcare support activities provided in collaboration with Munakata City and NPO Munakata Childcare Network “KoNet”: Childcare consultation meetings with members of the maternal and child nursing faculty**

SONODA Nozomi<sup>1)</sup> MAKINO Shota<sup>2)</sup> TANAHASHI Michiko<sup>3)</sup> YAMATO Sumi<sup>3)</sup>  
NIINA Mika<sup>4)</sup> OOSHIGE Narumi<sup>1)</sup> NAGAMATSU Miyuki<sup>1)</sup>

The childcare support center “Furakokko” is one of the childcare support services in Munakata City that is run by the city in collaboration with the NPO Munakata Childcare Network “KoNet.” At mini consultation meetings held during “Baby Time” and “Baby Day,” which are childcare support services hosted at “Furakokko,” maternal nursing faculty members from our university provide childcare consultations in the community as midwives at the request of Munakata City. This paper reports on some of the activities at “Furakokko” in 2019. The presented findings are expected to serve as a resource when considering the future of childcare support. In individual consultations at the mini consultation meeting during Baby Time held in June 2019, nursing faculty were consulted regarding breastfeeding, baby food, and the weight gain of children, and mainly gave instruction on skin care in group guidance. In individual consultations at the mini consultation meeting during Baby Day held in September 2019, nursing faculty were consulted regarding breast problems and mothers’ own use of oral medication, and in group guidance, nursing faculty provided instruction on how to adjust skin care, room temperatures, bedding, and outerwear and underwear, how to measure a child’s fever, and how to give medication to children. Mothers provided daily childcare while making various efforts and had a wide variety of concerns and worries. Feedback from the mothers who participated in the mini consultation meetings included “I am trying to incorporate newly obtained information into my daily life”. We must continue to collaborate with personnel from the Munakata City Child Development Department and the NPO Munakata Childcare Network; furthermore, it is necessary to continue to support mothers in their child-rearing efforts by providing not only child-rearing consultations but also group guidance using pamphlets and creating connections among mothers so that they can raise their children with vitality.

**Key words: Midwife, Nursing faculty, Childcare consultation, Childcare support service**

---

1) Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing  
2) Munakata City, The educational child part, The child upbringing department  
3) Non-Profit Organization, Munakata Kosodate Network Konet  
4) Saga University, Graduate school of Medical Science, Doctoral Course